



詩

歌

瞳

孔

小
笠
原
秀
實

つゞきたる日毎日ごこの秋晴れに幾年ぶるかよき山を見る
仰ぎ見る岩角の上の糸すゝき屋花は蒼き空に浮べり
今二十日経てあらばきて山人の紅葉語れるよき溪を行く
平らかにひろがり伸びて水を堰く岩に臥ながら秋の空見る
幾度か訪ね訪ねて折り折りの心刻みし溪なればよし
枯荷の色よく枯れてつゞきたる野道心の静もれるころ
たゞなづく山の秋空さはやかに雲のひこひら峰の端を行く
いくつもの小瀧みだれてかゝりたる深山溪川白き風あり
しら砂に小松まばらの丘なれ墓のつゞきて秋の夕でり

丘の上の人の焼場に人を焼き歸れば道の花亂れ咲く

たゞみの目かぞへかぞへてはてまでその集のはてざりし夜

丘に立てば小松を越えて見ゆる野の廣きをめぐる大川の秋

幾もこの小松からみてこゞまれるその一むらの目に残る丘

見はるかす麓の山の山波に動く日ざしの忙しさを見る

比叡愛宕鞍馬を北に南は生駒葛城峰のよき國

木々にかゝる蔦さまさまの葉にそめて溪のつゞけば秋にはてなし

白砂のあらきをこりて掌にうけてそのかゞやきに嬉しさを吸ふ

葛の葉は梢をはなれ高らかに瑠璃色空の秋を畫けり

しのぶ葉の一葉二葉の岩角にかゝりて山の秋風は行く

燦々流れて水に光あり光ながめて岩に停む

形象のさやけき秋にひかされて風の如くに吹かれ行く旅

よき岩によき水たぎるこの秋をまたうれしさの日には數へし

洗はれし岩のくほみのうす明りかそけき草々今秋にあり

かへりみる幾山川の幾年もなほ足らはぬかまたも山行く

石莚の茂る岩根に波立ちて流れし水を今も忘れず

そゝり立つ岩のはざまに根を下ろす瘦せの一つ葉瘦せの秋風
松の根に今年生えたる稚子楓三つ葉四つ葉に秋を知る秋
砂白の道にこぼせる枯松葉まばらつゞきて旅のさやけさ
見はるかす野邊は尾花の波打ちてはての山々日はかけり行く
屋根なければこゝむ小松の年ふりて幹に嵐を切る命なり

インターネット公開許諾のない作品には墨塗り処理を施しています。